

農業高校における花育活動

公益財団法人全国学校農場協会 常務理事

千葉県立鶴舞桜が丘高等学校 教諭 風間 龍夫

はじめに

全国の農業高校は約380校あり、農業高校としての特性を活かし、地域と連携しながらさまざまな地域活動に取り組んでいる、地域活動の中で、花いっぱい運動、花のまちづくり活動には多くの学校が以前から取り組み、農場協会の例年の調査では3割以上の学校が行っていると回答し、近年では花育活動にも積極的に取り組む学校が1割ほどに増えている。今年度は、昨年度に続き、全国の農業高校の、地域の人に働きかけて花を育てることの楽しさを伝え、花をいかに生活の中に取り入れて心豊かな生活を築いていくかという花育の観点に立ち実践している花育活動の取り組みをいくつか紹介する。

(注 農業高校は農業に関する科目を学習する学校をいうが、農業関係高校というべきで、農業学科だけからなる単独校、農業学科のある普通科等の他学科との併置校、総合学科校等からなる。)

1 北海道旭川農業高等学校(旭川市)の事例

「花の魅力地域に発信！」

記載 教諭 齊藤 睦

■ 活動の概要

旭川農業高校は、農業科学科・食品科学科・森林科学科・生活科学科の4学科が設置される全校生徒475名の学校です。北海道北部の農業後継者育成を目的に設立され、これまで多くの農業の担い手を輩出してきました。近年は、女子生徒の入学者が増加し65%を占める状況にあります。

草花を活用した学習は、生活科学科の1年生『農業と環境』、2・3年生『草花』、2・3年生コース選択科目『園芸デザイン』『園芸セラピー』に位置づけられ鉢花を中心に教育活動が実践されています。草花の生産学習と年7回の販売学習をとおして、多くの市民に草花の魅力発信しています。また、草花を活用し専攻班活動が中心となり、幼稚園や小学校、老人福祉施設などと交流を深めています。

■ 草花交流班の活動

草花交流班は、低迷する草花の消費拡大と普及を目的に活動しています。自分たちで栽培したバラをプリザーブドフラワーに加工し、イベントでのアレンジ講習や小学校との交流を行い、昨年からは花の6次産業化を目指した研究も始めました。

1 食べるたいせつフェスティバル

10月コープさっぽろが主催するこの催しに、昨年から参加しています。花のPRとプリザーブドフラワーの知名度を上げることを目的にプリザアレンジ講習を行っています。おもな体験者は小学生が8~9割です。バラのプリザーブドフラワーをメインにアレンジしますが、思い思いのアレンジを製作し楽しんでもらっています。

直径5cmほどの花器にアレンジしクリアケースの中に入れて完成となります。教えるのは例年2年生、アレンジの経験も指導経験も浅く最初は緊張して会話もあまりできずにいますが、入れ替わり体験者が来ることで徐々に慣れ、催事が終わる頃には自信あふれる講師の顔になっています。小学生から大人まで、自分たちが加工したプリザーブドフラワーを紹介しながら指導していく体験は何よりも生徒を大きく成長させてくれています。



食べるたいせつフェスティバル

2 旭川市立永山東小学校1年生とのクリスマスツリー製作

12月今年度から学校近くの永山東小学校と連携し、クリスマスツリー製作を実施しました。

プロジェクト活動で加工しているコニファのプリザーブドフラワーに装飾しクリスマスツリーを製作する交流です。1年生13名を対象に本校草花交流班2年生10名が講師となり交流するものですが、どういう装飾をどういう手順で行うか学校で打合せを重ね、花材や飾りも事前に準備しました。1年生ということもあり、長時間の集中は厳しいことも予想され1時間程度の交流となりましたが、子どもたちは熱心にクリスマスツリーづくりに取り組み、それぞれ個性的なものをつくりあげました。

本校生徒の活動後の感想では、小学校に出向いての活動は初めてだったこともあり緊張したようですが、有意義な体験であり今後も是非実施したい活動であるとのことでした。小学校とも相談の結果、次年度以降も継続していこうと話しを進めています。



永山東小学校活動

■ 園芸福祉班の活動

園芸福祉班は、園芸福祉プログラムとして、幼稚園や支援学校、老人福祉施設などと交流学习を実施しています。花の寄せ植えを一緒に製作し楽しんだり、花壇造成や野菜の収穫体験など多くの交流学习を実践しています。園芸福祉班の生徒は、保育士や福祉施設を希望する生徒が多く交流活動に積極的に取り組んでいます。

○特別養護老人ホーム「永山園」との園芸福祉交流

学校に隣接する「永山園」とは例年園芸福祉交流を実施しています。6月には、総合実習の時間に花壇造成として本校で生産している花の苗を用いてデザイン、植え付けを行っています。また、今年は天候の関係から8月と遅くなってしまいましたが、園芸テーブルへの花苗の植え込みを行いました。園芸テーブルは車いすの方でも植え込みができるように製作したテーブル花壇で、通常の花壇では見るだけで植え込みはできなかった方々も生徒と一緒にテーブル花壇に植え付けることができます。生徒が来園することを例年楽しみにしてくださり、生徒にとっても老人との交流は良い体験になっています。また、散歩を兼ねてもっと学校に足を運んでもらい温室などで花を楽しんでもらいたい、そして学校でも一緒に花壇に花を植え込みたいと考え、レイズドベットも製作しました。H型の花壇で、車いすの方々も手が届くよう工夫したものです。今年度2つめが完成し来年は学校に来てもらい一緒に植え込む予定です。



園芸テーブル



レイズドベット

■ おわりに

草花を活用した学習は、かつては園芸科が中心となり実施していましたが学科転換によって生活科学科がその役割を担っています。花苗の生産、鉢花、切り花、プリザーブドフラワーの加工と学習展開は多岐にわたっていますが、地域からの期待も強く感じています。草花の需要は比較的年齢が高く消費も減少傾向にありますが、草花を学習する学校としては、小さな子どもたちからお年寄りまで花を楽しんでもらえる活動をしていくことが大切であると考えています。今後も地域に支えられながら草花の魅力を多くの人に伝え、生徒たちの心を育む取り組みを実践していきたいと思っています。

2 群馬県立藤岡北高等学校(藤岡市)の事例 「生徒が伝える花育活動」

記載 教諭 高野 覚

■ 活動の概要

本校は、生物生産科・環境土木科・ヒューマンサービス科の3学科6コースの農業高校です。ヒューマンサービス科フローラルライフコースでは、草花園芸に関して栽培から活用まで幅広く学習し、その役割や必要性を理解し、美しく豊かな生活環境や地域社会の創造を目指し様々な活動をしています。

本校で栽培した草花を使い、生徒が身に付けた知識と技術で子供たちへの花育活動を実施しています。

■ 活動内容

(1) シンビジウムのコサージュ作成

群馬県藤岡市は洋ランであるシンビジウムの切り花生産が盛んであり、全国でも有数の産地です。しかし、切り花シンビジウムは東京などの都市部に出荷され、地域での流通はほとんどありません。小学生・中学生を対象に卒業式用のコサージュをシンビジウムで作成することで、地域の花に親しんでもらいたいと思っています。

小学校・中学校に出向き、作成方法を高校生が教えながら一緒に作ります。コサージュに使用する葉は、それぞれの学校にあるツバキの葉を使います。一本一本ワイヤリングする本格的な方法で作成しますが、簡単に付けやすいように安全ピンを用います。地域のシンビジウム農家の方々にも協力していただき、花の特徴などを説明してもらいました。

卒業式のコサージュということでみんな真剣に作ってくれました。シンビジウムを知らない子どもも多くおり、地域の花に触れる良い機会となりました。



卒業式のコサージュ



コサージュのワイヤリング

(2) 「おひさま教室」の実施

今から7年前、「自分たちが学習した内容で子供達と花育をしたい！」と生徒からの申し出がありました。自分たちで交流内容を考え、参加者募集から運営まで生徒自身がおこなう「おひさ

ま教室」です。屋外のおひさまの下、親子で参加する花育をテーマに始まりました。最初は希望者の3年生4名で実施しましたが、年々規模が拡大し、コース全体での活動になりました。参加者も年々増加し、今年度は約70名の子供達が参加してくれました。

呼びかける対象は、幼児から小学生低学年。内容は、生徒達がグループになり花育体験ブースをつくり、子供達に自由に回ってもらっています。担当する生徒によって、毎年変わりますが、今年度は以下のような内容で実施しました。

草花の寄せ植え 校内のバラを使ったフラワーアレンジメント 押し花しおりづくり
花育紙芝居 草木染めを使った小物づくり お花探しゲーム お花のお絵かき

生徒自身が、子供でも楽しんでできるように工夫し、安全にも考慮して実施しています。参加してくれた親子は、笑顔で楽しそうに体験してくれました。親子で花に触れる良い機会になったと感じています。



屋外で行う「おひさま教室」



子供たちに説明

■ 成果と課題

シンビジウムのコサージュ作成は、地域特産の花を使うことでシンビジウムへの愛着が増し、地域農業生産を知るきっかけになりました。また、シンビジウムは、花持ちが良く、コサージュに利用するのに適しています。卒業式を華やかにするシンビジウムコサージュを多くの学校に広めていきたいと考えています。

おひさま教室では、教員が最小限の条件や注意点を生徒に伝え、内容を生徒に考えさせることで、いろいろなアイデアが生まれました。地域の方々にも大変好評で、感謝の言葉も頂いています。

高校生が、先生役になって花育の指導をすることで、自分たちが学んでいることがより定着し、想像力やコミュニケーション能力も向上するなどの効果が期待できます。高校生がおこなう花育活動は双方向で有意義な活動であると感じます。

今後は、設定時期や対象年齢を考えたプログラムを作成し、年間を通した花育活動が展開できるとより効果的だと考えています。

3 千葉県立茂原樟陽高等学校(茂原市)の事例

「私たちの茂原駅前花壇！ 地域交流がはじまる」

記載 教諭 河内 麻友子

■ はじめに

本校は、生産技術科、生産流通科、緑地計画科、電子機械科、電気科、環境化学科の6学科からなる農業科と工業科の専門高等学校です。「真理を探究し、創造に挑戦する学校」、「広い視野を持ち豊かな感性を育む学校」「個性を伸張し、夢を叶える学校」「国際社会に開き、地域とともに輝く学校」を目指して各学科ともこれまで様々な取り組みを行ってきました。

生産技術科の園芸コース草花専攻では、2年次より草花を専攻して学習をしています。

■ 活動概要

JR外房線沿いにある学校の最寄り駅である茂原駅は多くの生徒や地域の方が利用する駅です。数年前、茂原市環境整備課の方から、「茂原樟陽高校の花苗で、駅前の花壇を作成してほしい」という依頼をいただき、高校生でも社会貢献ができると思い、科目「課題研究」の一環として、取り組むことにしました。地域に密着した活動のスタートです。



JR外房線 茂原駅



都市公園内占有許可書

■ 活動内容

市役所から使用の許可書をいただきました。活動の目的は、実習で栽培した花苗を公共の場に植栽することで地域住民への安らぎの場を提供し、茂原駅周辺の環境美化を推進することです。花壇により癒し効果が期待でき、社会貢献につながると考えました。茂原駅東口は、ロータリーの中心にある5つの花壇（エリアA～D2）と、商店街の両側に配置されている14のコンテナです。エリアAはロータリーのバスの発着地であり、バス利用者が主に目にするところです。Bは駅の正面口で、乙女の像を右側に配置し、2段仕立ての花壇で一番人目に触れる場所です。CとD1は、ロータリー右側の三角形の花壇で、D2は、メインストリートの突き当りにある花壇です。5つの花壇には1200株、商店街のコンテナには400株の花苗を使用しました。

まずは駅前に飾る看板作りです。多くの人に見ていただきたいと思い、駅正面口にあるエリア

Bに設置しました。平成27年5月の春花壇の作成に始まり、6月のアンケート調査、10月の社会福祉協議会の方との交流会、10月末の秋花壇の作成、そして28年度の春花壇の作成です。

ロータリーの花壇は、背後につつじが植栽されており、道路側から見やすいよう、背の低い花を手前に植えて、後ろの花の見栄えが良くなるようにデザインをしました。当日の作業効率を考え、株間は20cmで固定し、作業道具の準備をしました。



看板作り



エリアBに看板の設置

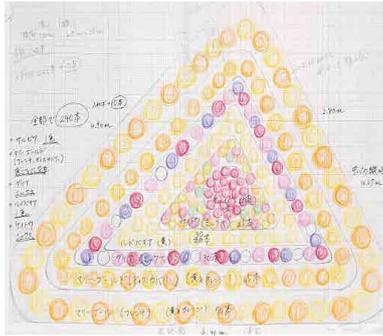
①平成27年度 駅花壇

27年度の春花壇は5月29日に行いました。使用した花の種類は、マリーゴールド、コリウス、サルビア、カンパニュラ、ルドベキア、ダリア、ノースポール、ケイトウの8種類です。27年度の秋花壇は10月30日に行いました。使用したのは、パンジー、ビオラ、ダイアンサス、ノースポール、キンギョソウ、ネメシア、アリッサムの7種類です。

エリアAの春花壇は、マリーゴールドとサルビアを、秋花壇はパンジーをメインに使いました。エリアBの春花壇は、黄色系のマリーゴールドを使い、秋花壇はノースポールやダイアンサスをメインに使いました。エリアCの春花壇は中央を寄せ植えに周囲を年輪状に配置し、秋花壇はベルト状にいろいろな花材を混ぜて植えました。エリアD1の春花壇は手前が明るい花になるようグラデーションを配置し、秋花壇は3種類に絞ってピラミッド状に配置しました。エリアD2は範囲が狭い分、春花壇はマリーゴールドを、秋花壇はビオラとキンギョソウに絞って配置しました。商店街の春のコンテナは7パターンを考え、色鮮やかにデザインしました。秋コンテナは、パンジーやネメシアなど、1、2種類の品種配置をしたことで、コンテナの統一感ができました。植栽活動を終えて4か月ほど経ったころの花壇の状態が、自分たちが思い描いていたデザインと違ってしまったことが反省点です。カンパニュラの生育が悪かったことや、株間、条間が正しくとれなかったことが課題点です。



植栽活動中



春・エリアCのデザイン画



コンテナ植栽完成



全員で集合写真

②アンケート調査

春花壇の制作を終えてアンケート調査を地域住民への調査や、本校生徒への調査、89件のアンケート調査を行いました。茂原駅利用者や商店街の方のご意見は参考になりました。商店街に花壇があることで華やかになったと答えてくれた方がほとんどでした。この植栽活動について多くの方から、今後も続けたほうが良いとお褒めの言葉をいただきました。

花を見たことにより、癒された、元気をももらった、という意見や中には全体の色をそろえたほうが良いとアドバイスや、花壇をハートや星などの模様にするほうがきれいというご意見もありました。今後も花壇作成とともに地域活性化させるため、このアンケート調査も続けていきたいと思えます。



地域住民への調査

③交流会

10月16日に社会福祉協議会と茂原市役所の方々が本校に来校され、交流会を行いました。プロジェクターをつかい、お互いの活動や作業手順などを話し合い、活発な意見交換ができました。最後にアンケートに答えていただき、多くの貴重なご意見をいただきました。



交流会で意見交換



生徒も意欲的に発言

④平成27年度 秋花壇

秋花壇は、交流会での活発な意見交換のおかげもあり、秋花壇当日の植栽は協力して効率よく行うことができました。作業の最後は、全員で記念写真を撮り、高校生も、社会福祉協議会の皆さんも笑顔があふれました。本校の活動が地元新聞に取り上げられ、地域の方からの反響も良かったです。

⑤平成28年度 春花壇

平成28年度の春花壇の作成がスタートし、エリアAは、ななめに区分けする作業が難しく、時間がかかりましたが、サルビアの見栄えが良くなりました。エリアBは、乙女の像を中心に複数の円を組み合わせるデザインです。苗の配置が複雑でしたが、社会福祉協議会の方々と効率よく作業をすることができ、はかどりました。エリアCは、3種類の花材をベルト状に配置したデザインです。20cm間隔のひもによりバランスよく作成することができました。エリアD1は、白いペチュニアがきれいに花壇を彩り、華やかで効果的でした。エリアD2は、デザイン通りにできたのですが、作業スペースが狭く、手順書のとおり作業を行うのが大変でした。これは、商店街に配置しているコンテナです。黄色とオレンジのマリーゴールドやニチニチソウとマツバボタンは大好評でした。

コンテナは定植できる数が決められている分、株間に余裕を持たせることを重視しました。すべての花壇が完成しました。春花壇は、晴天に恵まれ、作業がスムーズに行えました。今年度今回も活動を取り上げてもらいました。

このように地域交流として駅花壇の植栽をしてきましたが、大切だと思うことは地域の方と継続して活動に取り組むこと、更に活動の幅を広げていくことです。地域の方々や駅利用者にとさらに興味をもっていただくためにアンケート調査を参考に華やかなデザインを作成することが課題となりました。



エリアC植栽活動



地元新聞に掲載

■ まとめ・今後の課題

茂原駅前花壇全体のデザインが統一できるようにテーマを決め、花材と色を考えることです。花苗の栽培管理や手入れを率先して行うこと、よりわかりやすい手順書を作成して、社会福祉協議会の方と積極的に作業の打ち合わせを行う、植栽後は、アンケートを取り、地域に根付いた活動を目指すことです。この活動を通じて生徒たちの地域へ思いや関わりを大切にしていきたいと考えています。

4 兵庫県立但馬農業高等学校（養父市）の事例

「花育は優しい心を育てる活動 ～五感で感じる草花とのふれあい～」

記載 教諭 上垣 弘也

■ はじめに

花育は、平成26年に公布された「花きの振興に関する法律」の中にも、「児童、生徒に対する花きを活用した教育、地域における花きを活用した取組の推進」と位置づけられており、本県においても、行政をはじめ花き産業を取り巻く様々な立場から「花育」が実践されている。本校でも、環境教育を「心の教育」と捉え、人の心にアプローチする手法として「花育」に着目し、平成27年度より、課題研究の新たな試みとして花育に取り組んだ。

連携先を模索したところ、近隣の小学校との交流機会に恵まれ、6年生の児童を対象に「花育」を目的とした体験授業をおこなうこととなった。

この事例報告は、本校生徒が科目「課題研究」で取り組んだ「花育授業の研究内容」を中心に構成されている。

■ 「花育」を目的とした授業

花育授業は、花との「親しみ方」を提案するというスタンスに立って授業を組み立てることとし、児童の視覚のみならず、触覚や嗅覚、味覚などの感覚にはたらきかける体験型授業を行うことにした。この授業で使用するために研究・作製したのが「センサー・コンテナガーデン」である。

※センサー・コンテナガーデン

センサーガーデンは、「(sensory) 感覚の庭」であり、感覚を刺激し、植物の香りや感触などを楽しむことを目的とした庭である。そうした特徴をコンテナガーデンで再現するものとして「センサー・コンテナガーデン」の製作に取り組んだ。

【花育を想定して作製したセンサー・コンテナガーデンの利点】

- ・草花の植え込みには、発泡スチロールのレジャークーラーを使用した。このことで、授業の際、1区画を抜き取ることができ、児童に花を提示しやすいものとなった。また、栽培特性の異なる草花を別々に個別管理することも可能で、季節や授業対象、目的に応じて入れ替えができ、汎用性の高いコンテナガーデンとなった。
- ・持ち運びが可能である。脚は折りたたみ式で、運搬しやすく、準備もスピーディーにおこなえる。
- ・コンテナに高さ(脚90cm)を持たせることで、児童が対象の活動においては、多角的に観察することができる。
- ・座った状態での使用も可能であり、福祉施設等に活動の場を広げる可能性が確保された。



センサー・コンテナガーデン



植え込みに発泡スチロールのレジャークーラーを使用

■ 花育授業の実践

- (1) 目的：草花と関わる活動を通して、草花への興味・関心を喚起し、花を身近に感じてもらうとともに、花を慈しむ優しい心を育てる。
- (2) 対象：近隣小学校 6年生（男子5名、女子3名）
- (3) 場所：小学校会議室
- (4) 時間：準備10分、活動45分、片付10分
- (5) 花材：コリウス、ヒマワリ、ケイトウ、サルビア
アップルミント、ローズマリー、パイナップルミント



発泡スチロール容器に植える

- (6) 内容：上記の花材を活用し、五感を刺激する活動メニューを体験する。（以下参照）

感覚	花材	活動の内容
視	コリウス	スケッチに取り組む。（「葉にも観賞価値がある」ということを伝えるため、観察機会をつくる。）
触	ヒマワリ・ケイトウ	ヒマワリの茎、ケイトウの花を触ってもらい、その感触をカタカナ4文字で表現（記入）する。
嗅	ハーブ	ハーブの香りを嗅ぎ、アップルミント、ローズマリー、パイナップルミントの3択クイズに挑戦する。
味	ハーブ・サルビア	アンケートを記入。並行して、ハーブはハーブティ、サルビアは蜜を味わう。

(7) 考察

今回の取組では、「五感を刺激する」ことをテーマとしながらも、「聴覚」に働きかけるメニューを準備できず、検討の余地が残った。しかし、活動のようすを見ていると、児童はとても楽しそうな表情を見せ、意見を交換しながら積極的に活動に取り組んでおり、興味・関心の高さがうかがえた。記録用紙の記入にもたいへん意欲的で、バラエティー豊かで、ユニークなコメントを数多く書き残してくれた。

活動後のアンケートによると、「活動の前と後で、花への興味はどのように変化しましたか。」という問いに対して、8名中7名が「興味が大きくなった」と答えてくれた。また、自由記述の感想欄には、「普段できないことが体験できてよかった。」「植物を五感で感じる事ができた。」「花をじっくり見ると、新しい発見があった。」などの記述が見られ、活動の評価としては、一定の満足感を得ることができた。

児童の記述は、先入観にとらわれず、思ったことをストレートに表現してくれるので、「書くこと」「表現すること」は、花育活動において、重要な要素であると感じた。また児童は、一つ一つの活動に丁寧に取り組んでくれたため、想定を超える時間を必要とした。特に、スケッチでは、「最後まで描き上げたい。」「もっとスケッチしたい。」等の声が聞かれたので、時間設定においても改善が必要と感じた。

今回の花育授業は、本校生徒にとっても「教える側」に立つことで、学ぶことが多い取組となった。児童に対して、「見る」こと以外の草花の楽しみ方を提案したことで、「草花との関わり方」という点においては、特に学びを深めることができた。また、体験授業を作り上げていく過程において、アイデアを出し合い、試行錯誤を重ねたことで、ひとまわり大きく成長することができたように思われる。

今後は、活動内容にバリエーションを増やし、学年の違いや、活動場所の違いにも対応し得る準備が必要であると感じている。

こうした活動を通して、将来の生き方を考える上で、「花育」というキーワードを念頭に置きながら、草花との関わりを大切にし、それを「伝える」姿勢を持ち続けてもらいたい。

1 目で楽しもう (視覚)
コリウスの葉の輪郭をスケッチしてみよう!

表



裏





4 口で楽しもう (味覚)
まずは、サルビアの蜜(みつ)を吸ってみよう! どんな味がする? (自由に書いてみよう)

そんな甘くてよい、少し苦茶の味がね、
少しかきこいてよい、

次は、ハーブティーを楽しみましょう。(口も使いますが、鼻も使って楽しみましょう。)
どんな味がする? どんな香りがする? (自由に書いてみよう)

アップルミント ローズマリー

お茶の味はいいけれど、ローズマリーを
混ぜると味がきつくなるのでローズマリー
は少し少なめに
いれて、茶葉は少し

2 触って楽しもう (触覚)
ヒマワリの茎を触るとどんな感じ? カタカナで表現してみよう! (いくつ書いてもいいよ)

ザラザラ、ジリジリ、チクチク

ケイトウの花を触るとどんな感じ? カタカナで表現してみよう! (いくつ書いてもいいよ)

フサフサ、ホワホワ

5 今日、どんなことを学べたと思いますか?

花でいろいろすることを通してやるのがよかったです
ハーブティー家ではなかなかのまじいから
よかったです。

3 鼻で楽しもう (嗅覚)
ハーブの香りをかいで、ハーブの名前をあててみよう!

A	こたえ: パインナップルミント
B	こたえ: アップルミント
C	こたえ: ローズマリー



この中に正解があるよ!

アップルミント

ローズマリー

パイナップルミント

6 アンケートに協力してください

1. 家に花はかざってありますか? (はい) ・ (いいえ)
2. 家にある花を毎日見ますか? (見る) ・ (あまり見ない)
3. 学校以外で植物を使って遊ぶことはありますか?
(よく遊ぶ・たまに遊ぶ・まったく遊ばない)
4. 今日の交流会の前と終わったあとでは、花への興味はどのようになりましたか?
(大きくなった・変わらない・小さくなった)
5. もしもう一度、このような交流会があれば、どんなことに挑戦してみたいですか?

アップルミントをいじりたい。

記録用紙

■ おわりに

地域の子どもたちが、以前のように野山を駆け回って外遊びをする光景が見られなくなり、農村部に暮らしながらも自然と触れあう機会が減少している今日、「花育」を通して「草花との親しみ方」を伝えることには、たいへん大きな意義があると感じた。

本校が所在する養父市の花き産業は、農家戸数の減少もあって、厳しい状況がうかがえる。そうした中で、地域の未来を担う子ども達の視線を「草花」に向け、花の価値を伝えることには、ある種の使命を感じている。まずは、こうした取組を継続できるように、地盤を固め、活動の充実を図りたい。

5 岡山県立高松農業高等学校（岡山市）の事例

「スリー Sハートフルプロジェクト～文化の華香る街づくり～」

記載 教諭 松岡 隆雄

■ はじめに

2011年3月11日、東北地方を中心に日本を襲った大地震、津波が押し寄せ家屋は倒壊し、全てが波と共に流されていった。私たちは、被災地の方々に岡山から勇気と希望を届けようとJR岡山駅に立体花壇を造った。それがきっかけとなり、立体花壇で学校のある地域を明るく文化の華薫る街にしようと始めたのが「スリー Sハートフルプロジェクト」だ。私たちが毎日利用しているJR備中高松駅、通学路、学校の3つの頭文字からスリー S（表1）と名付けた。



表1 スリーSとは

■ 活動の概要

私たちの学校の周りには、豊臣秀吉が水攻めをしたことで有名な「備中高松城址」をはじめ「造山古墳」「最上稲荷」などの名所・旧跡がたくさんある。私たちが日々栽培している草花を用いて、地域の子供たちから高齢者の方々も巻き込んで、この地域の観光地とも結びつけた明るく活気ある街づくりを目的に取り組みを始めた。

1 JR備中高松駅

駅構内にJR西日本岡山支社の許可を得て造山古墳の形をした立体花壇を造った。設計から施工まで、すべて本校農業土木科の生徒が行った。花壇の上には備中高松城と備中国分寺（五重の塔）の模型を置き、四季の草花やいろいろなハーブ・野菜を植え付けて新しいタイプの立体花壇（写真2）ができあがった。



写真1 駅構内の造山花壇

2 通学路

約150mの通学路の左側にレイズドベッドといわれる車椅子の方でも植え付けや管理ができる花壇4個（1m×1.5m×0.8m）（写真2）と、交差点にはハーブと四季折々の草花を植えられる花壇（約20㎡）、フェンスにはハンギングバスケットを10個取り付け、五感で楽しむことのできる鮮やかなストリートとなった。



写真2 レイズドベッド

3 学校

校門から校舎までの左右にある植物園（約50m）には、ハンギングバスケット16個と豚やうさぎなどの動物トピアリーを置き、楽しみホットする癒やしの空間となった。



写真3 動物トピアリー

■ 活動の内容

2年目以降は、地域の方々との交流活動に重点をおいて、景観創造（Scene）、起業学習（Study）、社会教育（Social）の頭文字のSを新たなスリーSと称して取り組んでいる。今回は、地域の方々と草花の装飾活動・管理を協働で行っている、その一端を紹介する。

1 寄せ植え作り・ハンギングバスケット作り



写真3 寄せ植え作り



写真4 ハンギングバスケット作り

年間2回、春は寄せ植え作り、秋にハンギングバスケット作りを地域の方に呼びかけて開放講座の一環で行っている。参加者は15人から20人程度、保護者・地域の高齢者が中心である。企業学習及び社会教育活動として、生徒に草花や作り方の説明をさせ、日頃学んだ技術や知識に磨きを掛けている。参加された方々の「ありがとう」「きれいにできたよ」という言葉に励まされ、緊張しながらも楽しく行っている。

2 花壇造り



写真5 寄せ植え作り



写真6 ハンギングバスケット作り

年間2回、春と秋に地域や保護者に呼びかけ実施している。生徒が準備した草花とデザインをもとに、みんなで駅構内の造山花壇（写真5）と通学路のレイズドベッド（写真6）4個カ所を植え付ける。参加者はほとんど同じ顔ぶれの10人程度。「家の前が明るくなるわー」「駅が華やかだね」とよく言ってくれる。また、新入生の社会貢献活動として、地域の環境美化活動と兼ねて交差点花壇（写真7）の植え付けや花壇の草花の手入れを行っている。



写真7 社会貢献活動

3 押し花 しおり作り



写真8 草花〇×クイズ



写真9 押し花しおり作り

スリーS活動が5年経過した時、認知度や関心度についてアンケートを実施した。対象者は、地域の方（60人）、教員（20人）、生徒（120人）。その結果、1/3しか知られておらず、特に中学生以下は誰も知らなかった。そこで、平成27年の12月からは、生徒の発案で地元の保育園と交流を持つようになった。草花の名前や利用についての〇×クイズ（写真8）と押し花でしおり作り（写真9）を行った。園児（36人）は、草花についての興味・関心が高まり、日々の生活に草花がどのように利用されているかなどを知ることができたと思う。生徒は、園児の元気に圧倒されながらも笑顔いっぱい会話したり、指示を出したりしていた。

■ 課題

活動の方法はかなり定着したといえる。しかし、校内外の行事や諸活動におわれ、実施日が制限されてしまい、思うように地域協働活動ができていない。また、限られた人たちとの交流活動となっており、PR活動をとおして輪を広げていきたい。小学生や中学生とも草花を題材にした交流を考えていきたい。今後、この活動を長続きさせるためには、人的な面もあるが、草花苗や用土、管理に関わる経費を確保することも重要な課題である。

■ 効果

この活動は、他学科との連携、学校のPRに繋がった。また、高松地区の街並みが変わり、多くの観光客の目に触れ、高松地域のPRにも貢献していると考えられる。そして、草花を用いて環境を整備したり、装飾活動や管理作業を協働で行うことで地域の人たちとの絆も深まった。

生徒は自らが指導者となるため、教えてもらう立場から教える立場になり、積極性が身についた。また、播種を含めた栽培計画から花材の準備、装飾や交流活動（利用）まで、一連の流れを体験できるので、達成感や充実感を味わうことができ、企画・立案力、準備・運営力、コミュニケーション能力など、多くの力がついたことはいままでもない。

■ おわりに

平成22年度から始めたこの活動も7年が経過する。科目「総合実習」「課題研究」、学校設定科目「園芸装飾」間のスケジュールを上手に立て、できるだけ多くの生徒、教員、幼児から高齢

者までが楽しく参加できる活動にしていきたい。地元企業や商工会議所、観光地とのタイアップも図り、今まで以上に地域の方の理解と協力を得て、文化の薫る地域づくりを目指して精力的に活動していきたい。

さいごに

今年度も全国の農業高校の、花育という観点に立ち実践している花育活動の取り組みをいくつか紹介した。一昨年度まで紹介した、花いっぱい運動・花のまちづくり活動の地域を花と緑で飾る活動と若干重なるものもあるが、どれも農業高校生が地域の人に働きかけ、地域の人と花を介して交流・活動し、花を活用する花育の観点に立ったものである。活動内容は草花の寄せ植え・コンテナガーデン・フラワーアレンジメント・コサージュ・花壇作り等と多岐にわたっている。対象者も、園児・小学生・中学生・地域住民・老人等と幅広く、活動場所は自分達の学校だけでなく、幼稚園・保育園・小中学校・福祉施設・駅・地域イベント等の外部に出向くことも多い。活動形態は、生徒が指導役となり地域の人々に懇切丁寧に教える・生徒が人前で説明する・地域アンケートを行なう・地域交流会をもつ・クイズ形式にする・花育紙芝居を作る・花育授業を実践するなど活動は多彩で、花育の効果的な進め方を研究し改善を図っている。

活動の取り組み状況は、写真でも分かるように、生徒と参加者がみな笑顔で生き生きと取り組み、花育が「花や緑をとおして、命を育み、やさしさや美しさを感じる気持ちを育む」ということがまさによく理解される。農業高校の花育活動の特徴は、農業高校生が地域の人たちを対象に、生徒自らが、主体的に取り組んでいることである。各執筆者が述べているように、花育活動の効果は生徒にとって、学習したことを確かなものとし、人のためになるということで学習意欲を高め、成就感、達成感を持たせることができる。さらに、人とのふれあいをとおして、コミュニケーション能力を高め、社会性、人間性の涵養に効果があるものと思われる。

農業高校の学習の特徴は、体験的な学習をとおして農業に関する知識と技術を習得することで、その学習方法はプロジェクト学習といい、自ら課題を設定し解決していく課題解決型学習である。知識を詰め込むだけの教室の黒板と教科書の授業ではなく、実践的な学習である。

さらに、今回の農業高校の花育活動は、学習したことをもとにして地域に働きかけ、地域と交流し、そのことによって地域から学ぶという循環の中で行われていくものである。この人とのふれあいをとおしての学習は、地域貢献型の学習であり、体験的学習を発展させた新たな学習方法である。農業高校にとって花育は大変教育的価値が高く、これからも積極的に取り組む農業高校が増えていくものと思われる。皆さんには、今後とも全国の農業高校生が取り組む花育活動にご注目いただければと存じます。